Fate/Samurai Remnant
material

Produced by ω-Force

Fate/Samurai Remnant material

Fate/Samurai Remnant™

フェイト／サムライレムナント

Fate/Samurai Remnant material

本書にはゲームのストーリーに深く関わる内容が含まれています。
全ルートクリア後にご覧いただくことをおすすめいたします。

Fate/Samurai Remnant material

CONTENTS

Fate/Samurai Remnant
フェイト/サムライレムナント



発売記念コメント

『Fate/Samurai Remnant』発売おめでとうございます。まさかコーエーテクモさんで「Fate」の新作を作って貰える日が来るとは。宮本伊織とセイバーのコンビは、「Fate」史上でも屈指の名コンビだと思っております。

『Fate/Samurai Remnant』デザイン監修
TYPE-MOON　武内崇

・・・

発売おめでとうございます。たくさん頑張りました。

『Fate/Samurai Remnant』キャラクターデザイン
渡れい

みや　もと　い　おり
宮本伊織

性別 男　地域 日本
身長 175cm　体重 65kg

設定作成 桜井光・奈須きのこ
キャラクターデザイン 渡れい　CV 河西健吾

Miyamoto Iori

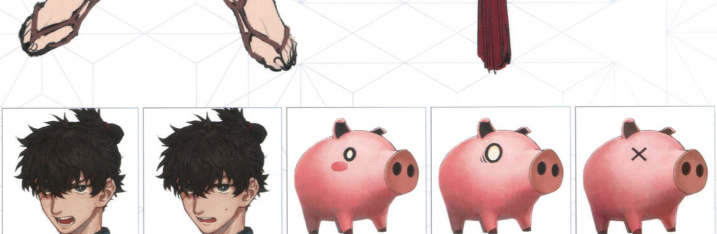


表情



設定画





設定画



人物像

本作主人公の一人。
二天一流の遣い手。
剣豪・宮本武蔵の弟子にして養子であった男。
セイバーのバディ。

柔軟な思考と、状況への高い適応力を有しており、
物事に対する理解が早い。
盈月の儀に際しても、さして混乱せず状況を把握する。
穏やかな剣士―――
として多くの人の目に映る。

師である武蔵をして
「生まれる時代を間違えた」と称されたことがある。
その意味するところは、
本作の物語をご覧いただければ分かるだろう。

戦闘スタイルとして、
五輪の書になぞらえた地水火風空の型を使い分けるが、
あくまで剪定事象としての本作の伊織のオリジナル。
実在する二天一流とは大きく異なるものである。

奥の手は、紅玉の書から教わった宝石魔術。
特に火炎攻撃を得手とする。
火遁、と称しているのは伊織の解釈によるものであり、
実際には火の宝石魔術である。
魔術回路についても、伊織は経絡と称する。
神秘や時計塔など、通り一遍の知識は紅玉の書から
伝えられているが、術者としての自覚は薄い。







令呪

デザイナーコメント

形になるまでに少し苦労した人です。武内先生からイメージイラストをいただきましてようやく道がひらけた感じでした。
平凡なようでいて、何かを腹の内に隠しているような鋭い瞳にしようと、特に表情を頑張りました。(渡れい)



セイバー

クラス	セイバー	真名	ヤマトタケル	性別	？
出典	『古事記』『日本書紀』など			属性	中立・善
地域	日本	身長	154cm	体重	49kg

設定作成 桜井光

キャラクターデザイン 武内崇　CV 山村響



表情



設定画





設定画



人物像



本作主人公の一人。
真名はヤマトタケル、クラスはセイバー。
伊織のバディ。

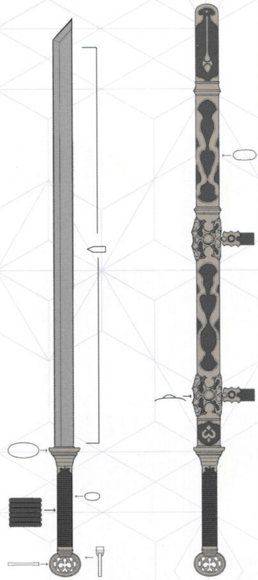
戦闘の天才。
人間の領域を遥かに超えている。
妖物魔物を斃し、人の軍勢を殲滅し、
時には神性さえをも単身にて斃す戦闘能力は、
乱世を知るはずの伊織から見てもまるで桁が違う。

コメ(米)に執着するのは、
稲作を平和の象徴だと捉えているから。
おいしいコメが存在することに、
タケルは自然と喜びを見出し、
最愛のオトタチバナヒメを感じるのかもしれない。

当初は伊織のことを「力もたざる者」「弱きもの」と
見ており、マスターなど要らない、と
切り捨てたがっていたが……
共に戦いの日々を過ごすうち、
どのように伊織を想うに至ったかは、
本作の物語をご覧いただきたい。

奥の手である宝具を、
通常時には隠蔽している――
というスタイルは、原典『Fate/stay night』での
セイバーことアルトリアの踏襲。
アルトリアは宝具『風王結界』の風で刀身を隠したが、
タケルは宝具『水神』の水で刀身を覆い、
更に形態を蛇行剣へと変化・擬態させている。

なお、出逢う人間の大半はタケルを女性と認識し、
特にタケルもそれを否定しないため、
作中で性別がクローズアップされることはない。



デザイナーコメント

「Fate」の顔役としてのいつものセイバーっぽさを押さえつつ、もっと中性的に新鮮味が出るように。衣装デザインは、毎回のことではあるのですが、時代感よりも人物の持っているイメージと「Fate」感に重点を置きました。(武内崇)

鄭成功

ていせいこう

性別 男　地域 中国
身長 180cm　体重 83kg

設定作成 東出祐一郎
キャラクターデザイン 渡れい
CV 前野智昭

表情





Zheng Chenggong

人物像

歴史上の人物。
近松門左衛門作の浄瑠璃『国性爺合戦』で
後年の活躍が語られる。

人格的には伊織より完成されており、
彼の保有する軍備力を考えると伊織を上回ることは確実。
しかし、殺し合いならば伊織に一歩劣る。

聖杯に託す望みはやや俗物的か、と本人は考えているが、
それ故に叶わない願いではないだろう……と踏んでいる。

願望のために何かを切り捨てる冷徹さは、
国を想う焦りが故か。
今回のような剪定事象であれ、編纂事象であれ、
真に英雄として立つのは、これより後のことである。

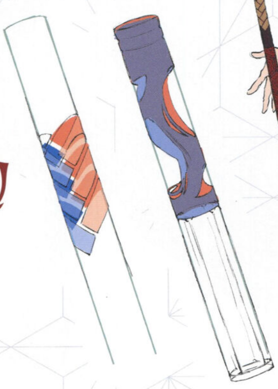
設定画





デザイナーコメント

人物を少し勉強しまして、また頂いたキャラクター設定もすごく気持ちのいい印象を受けたので、とにかくすごいイケメンにしようというストレートな思いで作りました。センター分けは苦手なのですが、かっこよく描けたんじゃないかと満足しています。相棒のサーヴァントに合わせて色合いや服のデザインをしてみたので、2人揃って出てくるのが楽しみです。
（渡れい）





令呪

アーチャー

クラス アーチャー	真名 周瑜	性別 男
出典 史実、『三国志演義』		地域 中国
属性 秩序・中庸	身長 160cm	体重 53kg

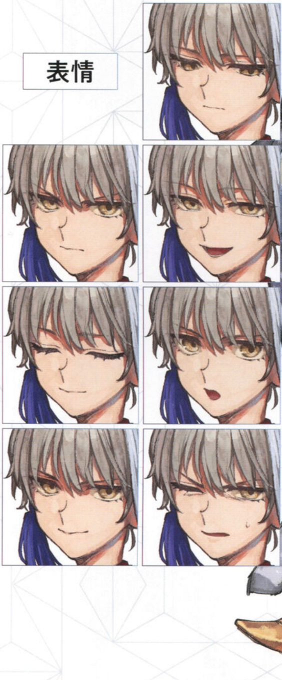
設定作成 東出祐一郎

キャラクターデザイン 森井しづき

CV 小野賢章



表情



人物像

鄭成功に召喚されたサーヴァント。真名は周瑜。
クラスはアーチャー。

ストレートにユーザーが「ああ、周瑜だな」と
感じ取れるような人格。
デザイン的には皆がイメージする周瑜より、
やや若かりし頃のものを想定している。

周瑜は史実の側面と『三国志演義』の側面が
両方打ち出されているが、本人の精神的には史実を
ベースにしているようだ。
そのため、『三国志演義』に絡んだ能力に関しては
どこかチート能力を授かったような感覚になるとか。
(拒否感は全くないが)

マスターである鄭成功との相性は抜群に良い。
これ以上を望むなら本来の主君である孫策や孫権を
引っ張ってくるしかないだろう。

そしてそれはつまり、彼のスキルである『王佐の才』も、
効果を最大限に発揮しているということである。

ただでさえトップクラスの実力を有しているのに、
このスキルで更にパワーアップしているという、
対戦相手にとっては極力戦闘を避けたい存在だっただろう。

設定画









デザイナーコメント

最初にTYPE-MOONさんから周瑜の話を聞いた時、あのコーエーテクモゲームスさんが開発されているなら、あの周瑜を出してもらいませんか？　あの周瑜が見たいです！　と返したところ、どうやらそういうのではなかったらしく、そこであの周瑜像と重ならず、そのうえ髪の色を変えただけのようにならないような形を探ることになりました。そしてなんだかんだあって、提出して通った少年姿の周瑜をもとにデザインを進めていきました。(森井しづき)







地右衛門（ちえもん）

性別 男　地域 日本
身長 178cm　体重 61kg

設定作成 東出祐一郎
キャラクターデザイン 渡れい
CV 岡本信彦

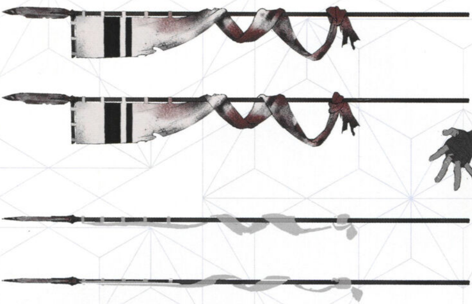
表情

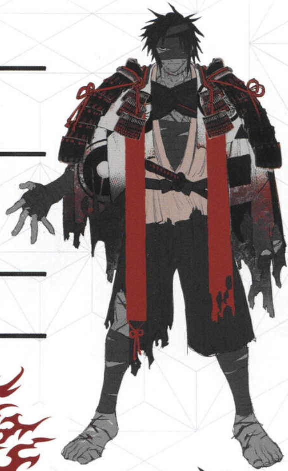


Chiemon



設定画





人物像

戦国時代を経て平和を獲得したのが江戸時代ならば、
地右衛門はその時代に切り捨てられた者。
決して主人公にはなれない存在だが、
その一方で誰より鮮烈な輝きを持つキャラクターに
なればいい……という設計。

本作においては、伊織側にも幕府側にも与することなく、
独自の行動を取ることになる。

なお、島原の乱の数少ない生き残りであり、
魔術は森宗意軒に手ほどきを受けた。
一代限りのインスタント魔術師だが、
元々の才能があったのか、あるいは先祖に
魔術師がいたのか、それなりに戦術として
機能しているようだ。

彼が聖杯に望むものは、物語で明らかになる通り。
切り捨てられた者に、一抹の救いを。
たとえそれが、無意味なものであろうとも。



令呪





デザイナーコメント

戦場に落ちていた服や武具を寄せ集めて身につけて「なんとか形を成している男」みたいなイメージで描きました。今回のストーリーは彼個人の人格よりも、歴史や土地が生み出した澱みみたいな役割が重視されてると思ったので、痛々しい感じが出てればいいなと思います。武器は相棒のサーヴァントに合わせてみました。(渡れい)

ランサー



クラス ランサー
真名 ジャンヌ・ダルク
性別 女
出典 史実
地域 フランス
属性 混沌・悪
身長 159cm
体重 44kg

設定作成 東出祐一郎・奈須きのこ
キャラクターデザイン 武内崇
CV 坂本真綾

表情



『Fate/Samurai Remnant』における人物像

地右衛門に召喚されたサーヴァント。
真名はジャンヌ・ダルク、クラスはランサー。
オルタ(別側面)としての召喚。
本来、ジャンヌ・ダルクの別側面が召喚されることは
有り得ない。従って本作ではかなり捻った状態で
召喚されている。

通常のジャンヌ・ダルク(オルタ)とは精神性、人格も
異なっており、ベースになっているのは
ルーラーのジャンヌ・ダルクの方である。

ルーラーでは有り得ないほどの弱体化と引き換えの
オルタ状態。精神的にはやや弱気になった
ジャンヌ・ダルクというイメージ。

イメージとしては地獄を望む男と、それに寄り添う聖女。

地右衛門が盈月に託す真の望みも看破しており、
それ故に今回の召喚では、万人ではなく、
彼の救済にのみ注力することを決意している。

設定画





デザイナーコメント

衣装としてはジャンヌオルタそのままですが、
ランサークラスでの召喚ということで新規に2
本の槍を持たせました。タケルと合わせて、武
器デザインは下越が担当しています。(武内崇)



由井正雪（ゆい しょう せつ）



性別	女	地域	日本
身長	160cm	体重	48kg

設定作成 桜井光　キャラクターデザイン 渡れい

CV 田村睦心

表情



人物像

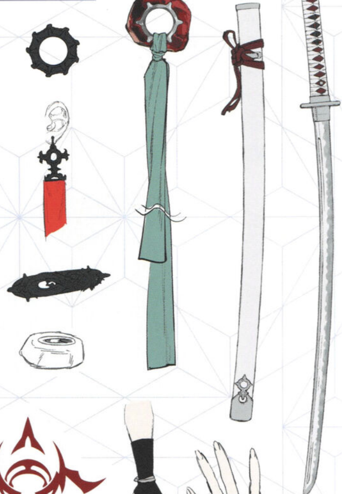
理想のために生きるホムンクルス亜種。
名は歴史上の人物のものだが、
剪定事象としての本作での正体は大きく異なる。

妖術師・森宗意軒によって形作られた、疑似的な人造生命。
短命ながら完成度の高いホムンクルスの性質を持ち、
高度な知性と優秀な魔術回路、
そして無垢の精神を有する。
知識も自覚も有してはいないが、
ホムンクルスとしての技術の源は西洋のアインツベルン家。

森宗意軒の理想家としての一面を受け入れ、
自らも理想を追求し、
この世の残酷———「歪み」を正すべく盈月を求めた。

作中では無意識ながら、伊織に惹かれた。
「人として正しく」あらねばと努める伊織の姿勢に、
宗意軒の語った「天草四郎」と同様の、
理想を求める気高さを感じ取っていたのだが……。

設定画





令呪



デザイナーコメント

「男装の麗人」という指定がありましたが、どのくらいの割合で男女の印象を入れるかに苦戦しました。色々と入り組んでいる設定でしたので、歴史で学ぶ彼の印象をあまり意識しないように作りました。ポニーテールの部分が気に入っています。(渡れい)



ライダー

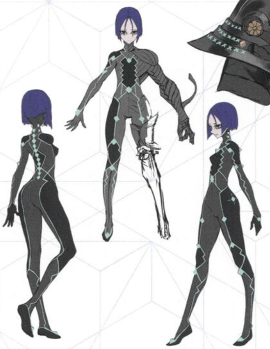
Rider

クラス ライダー　真名 源頼光／丑御前　性別 女
出典 『吾妻鏡』『丑御前の御本地』など　地域 日本
属性 秩序・悪　身長 200cm／152cm
体重 150kg／39kg

設定作成 桜井光
キャラクターデザイン 本庄雷太
CV 戸松遥



設定画





『Fate/Samurai Remnant』における人物像

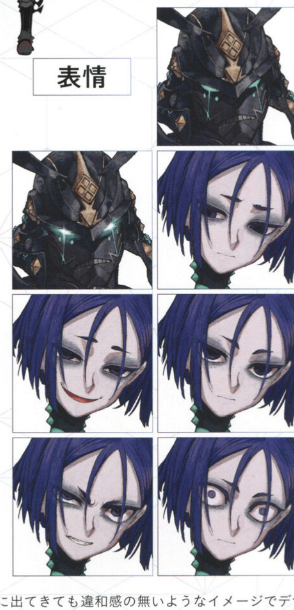
由井正雪に召喚されたサーヴァント。
真名は源頼光／丑御前。
厳密には丑御前が英霊としての真名となるが、
源頼光と丑御前は同一人物の別側面とでも言うべきモノ
であるため、特殊な扱いとなる。

真名を源頼光として召喚される場合には、
本作のような少女の形態を取ることはない。
この姿は、父･源満仲によって
人界守護･怪異鏖殺の兵器として設計された、
およそ人の娘としての感情を有していなかった時期の
「怪物だった頃の源頼光」の姿なのである。

正雪の召喚に応じたのは、
人の姿をとった人外であるが故の、
世界の歪みに対する率直な疑問。その共感。

ただ悲しいかな、
丑御前はその回答に、破壊以外のすべを見出さなかった。
幾度召喚されようと、考えが変わることはない。

表情



デザイナーコメント

「黒衣の闇武者」として、特撮ヒーローものの敵対組織、その幹部に出てきても違和感の無いようなイメージでデザインしました。とにかくかっこよく強そうな黒武者として時代感を残しつつ、所々にSF風味を追加したことで、和甲冑姿でありながらダークヒーロー感のあるキャラになったと思います。(本庄雷太)

土御門泰広（つちみかど やすひろ）

Tsuchimikado Yasuhiro

性別 男　**地域** 日本
身長 182cm　**体重** 75kg

設定作成 東出祐一郎
キャラクターデザイン 渡れい
CV 三上哲

表情





人物像

歴史上の人物。

盈月の儀に託す願望は一族の栄達という
平凡なものではあるのだが、
だからこそ誰よりも必死であり、叶えようと渇望している。

ただ、キャスターを召喚したのは
かなり博打だったことは否めない。
それでも、セイバー・アーチャー・ランサー……
いわゆる三騎士を召喚しなかったのは、
それだけ目を惹くことを恐れていた、ということ。
盈月の儀は裏側で戦ってこそ、という考えがあり、
情報こそが重要であると彼は結論付けていた。

先祖である安倍晴明が残した遺産(千里眼によって得た
未来の情報/聖杯戦争についての事柄)を元に、
聖杯のコピーである盈月を造り上げた。
なお晴明は、「あとは自分で工夫してみなさい」とでも
言うかのように、不完全な聖杯や聖杯戦争の情報しか
残してはいなかった。

己が死力を振り絞り、幾つかの偶然と奇跡を経て、
ぎりぎり英霊一騎分の召喚が叶うまでの盈月を作成した
泰広は、キャスター・稗田阿礼を召喚。
(これを以て泰広は独力での召喚を為したと誇っているが、
盈月の力や晴明の遺産、特に千里眼の情報を活用することで
成功させた、と考える方が妥当であろう)
その後はキャスターの補助を受け、
複数のサーヴァント召喚を可能とする域にまで
盈月を改造し、盈月の儀を催すに至った。

影で暗躍する男、勝利に拘る男。
そして、誰よりも盈月の儀に踊らされた男である
と言えるだろう。

設定画





令呪



デザイナーコメント

キャスター陣営というお約束の怪しい空気を纏わせつつ、もっとわかりやすく暗黒面を全面に出したみたいなキャラクターにしようと思い、とにかく黒くしました。ちょっと面倒でしたが、彼の服が描いてて一番楽しかったです。(渡れい)

キャスター

クラス	キャスター	真名	稗田阿礼	性別	男
出典	史実	属性	中立・中庸		
地域	日本	身長	174cm	体重	56kg

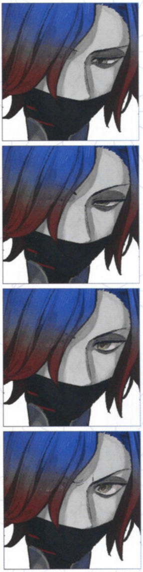
設定作成 東出祐一郎 キャラクターデザイン pako

CV 勝杏里



Caster

表情



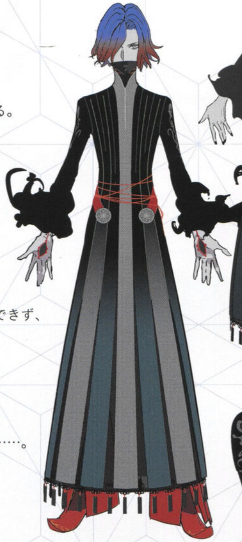
人物像

土御門泰広に召喚されたサーヴァント。
クラスはキャスターだが、レコーダーを自称する。
真名は稗田阿礼。

神経質、偏屈、動かない……という感じの、
とても異色のサーヴァント。
作家ではないため、創作ではなく記録に拘っている。
そのため、盈月の儀に託す願望は
「世界の記録を正しい形で完全に保存する」こと。
それがイコール稗田阿礼という存在に、
確かな実在性を与えるからだ。
——なお、ここで言う正しさとは、
稗田阿礼自身にとっての正しさを意味する。

キャスターとしては高度な魔術を行使することはできず、
陣地作成も道具作成も不得手。
どちらかといえば宝具の強さで押し切るタイプの
サーヴァントと言えるだろう。
もっとも、その宝具も極めて使い勝手が悪いので、
全体的にピーキーな仕様には変わりはないのだが……。

設定画



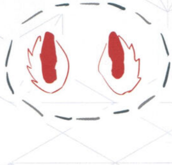


デザイナーコメント

暗闇にぼんやり浮かんでるような、おばけのような、見間違えのような、ちょっと怖いような、でも本人はそんなつもりないような、そんなこのコメントのようなとても朧気なイメージです。
(pako)

















ドロテア・コイエット

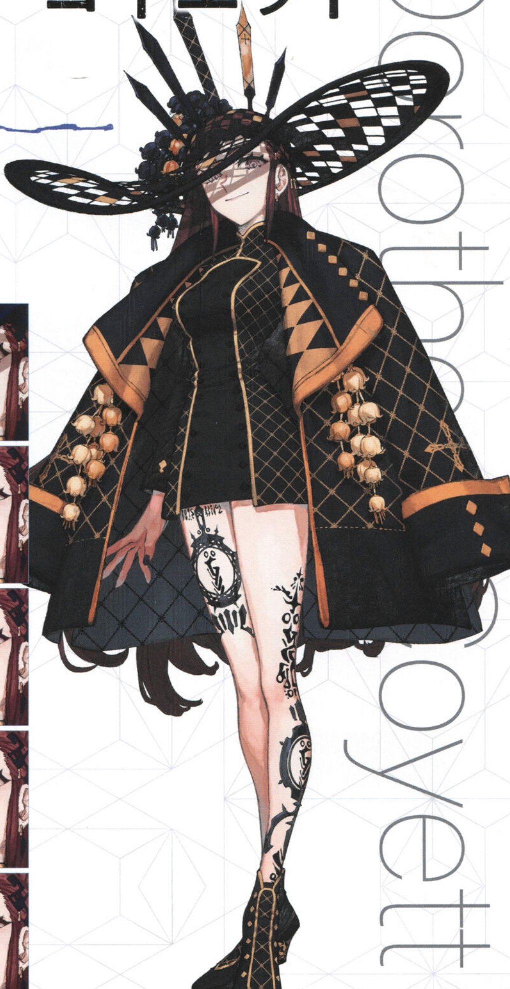
Dorothea Coyett

性別 女　地域 欧州
身長 157cm　体重 44kg

設定作成 桜井光
キャラクターデザイン 渡れい
CV 平野綾

表情





人物像

ノブレス･オブリージュを心の芯に置く女傑。
オランダ商人にしてスウェーデン貴族、
フレデリック･コイエットの愛娘。

盈月の儀に参加しているものの、
あくまで人生の通過点であり、
儀に家系と自身のすべてを捧げるつもりは毛頭無い。

ただし……
持てる者、貴族としての責務はすべてに優先される。
果たすべき務めのためであれば、
自らの命を使うことに躊躇いはないのである。

史実では、後に父フレデリックは鄭成功に敗北。
剪定事象としての本作の時系列においては、
物語の出来事の後、
父と共に鄭成功と戦った――のかもしれない。

設定画



デザイナーコメント

「悪役令嬢」と言う指示がありまして、その所為でかなり私好みの女にし過ぎてしまいました。ものすごく心配だったのですが案が通って本当によかったです。魔術師であることを色んな角度から楽しんでもらいたいなと思って、なるべくおしゃれにしてみました。かっこいい感じが出てたら嬉しいです。（渡れい）





令呪



アサシン

クラス アサシン

真名 甲賀三郎　**性別** 男

出典『諏訪の本地』『神道集』など

地域 日本　**属性** 中立・悪

身長 220cm　**体重** 170kg

設定作成 桜井光

キャラクターデザイン danciao

CV 石川英郎



表情



人物像

ドロテア・コイエットに召喚されたサーヴァント。
真名は甲賀三郎。
クラスはアサシン。

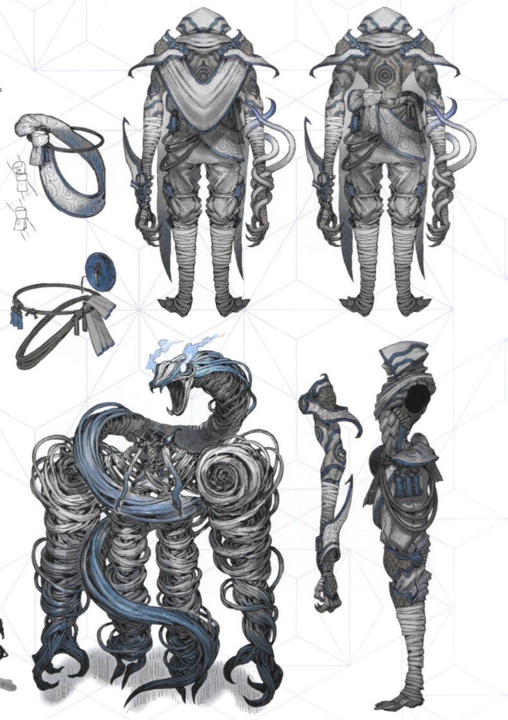
後の甲賀流忍術の開祖こそ自らであると称し、
数多の奇怪な術を行使する。
ただ、甲賀望月氏の祖ではあるものの、
三郎が忍者として活動したという伝説はない。
それでも忍術に似た能力を行使するのは、
身に備えた神通力の数々、
そして異界行を成し遂げた生存術の為せる業だろう。

マスターであるドロテアを好ましく思い、
領主だった己の過去を重ねていた。

しかし最後には、叛逆と暴走の道を選んだ。
彼女が自分を乗り越え、成長するために。

設定画





デザイナーコメント

フードや蛇の目の装飾など、全体として蛇に擬態しているようなイメージでデザインしてみました。苦労したのはどこまで異形感を出すかのバランスですね。モンスター寄りにしすぎて調整したのを覚えています……笑。好きなモチーフなのでノリノリでデザインできました！(danciao)



高尾太夫（たかおだゆう）

性別 女　地域 日本

身長 164cm　体重 54kg

設定作成 桜井光　キャラクターデザイン 渡れい

CV 小清水亜美

表情





人物像

三代太夫の一角、高尾太夫の二代目。
歌舞伎や浄瑠璃にしばしば登場する、歴史上の人物。
(本作では仙台高尾を二代目とする)

盈月の儀において唯一、
およそあらゆる術式を修めていない。
魔術師ならず、陰陽師ならず。
それでも胸に秘めた願いは強く、血と涙が滲む。

術者としては話にならない(何せ術が使えない)が、
逸れのバーサーカーを早々に味方に引き込み、
拠点・吉原を難攻不落の砦へと変えた。

無礼討ちされそうになっていたところを
バーサーカー・武蔵ちゃんに助けられ――――
という出逢いだったが、
「高尾物」と呼ばれる後世の創作の中では、
二代目高尾太夫こと仙台高尾は、
伊達政宗公の孫である綱宗の手で殺されている。

デザイナーコメント

太夫の名に相応しい、色気を出しつつも
しっかりと学のある女性になるように心
掛けました。装飾がどんどん増えてしまっ
てちょっと後悔してます。相棒のサーヴァ
ントとはまた別の派手さを目指したので、
画面が豪華になってくれたらいいなぁと
思っています。(渡れい)



令呪

設定画







バーサーカー

クラス バーサーカー　真名 新免武蔵守藤原玄信（宮本武蔵）

性別 女　出典 史実、『Fate/GrandOrder』

地域 日本　属性 混沌・善

身長 167cm　体重 56kg

設定作成 桜井光・奈須きのこ

キャラクターデザイン こやまひろかず

CV 佐倉綾音

表情





『Fate/Samurai Remnant』における人物像

高尾太夫の前に現れたサーヴァント。
真名は新免武蔵守藤原玄信。
通称、宮本武蔵。
クラスはバーサーカー。

本作及び史実における男の武蔵とは異なる、
剪定事象――――現代にまでは続かず虚ろと消えた
イフの世界に生まれ、
数多の並行世界を渡った女武蔵。

『英霊剣豪七番勝負』を経た後の状態、
すなわち一度死した英霊である。

本来のクラスからバーサーカーに変更されており、
本来理性で抑えている部分の加減がやや効きにくい。
たとえば、目的のための犠牲の許容が
普段は百までとするなら、今回は軽く万を超える。
おそらく盈月の影響なのだろう。

本作に限り、伊織の「五つの型」を楽しげに真似る。
セイバー霊基時にはまず有り得ない、
バーサーカー霊基であるが故の遊び心である。

実は、高尾太夫のサーヴァントでは――――ない。
本来召喚されるはずだったバーサーカーの席に、
女武蔵が収まってしまった形である。
並行世界間の漂流を行えなくなったはずの彼女が
今回限りの漂流を行った理由は、
伊織との縁のためと予想されるが……
女武蔵本人はそのことを知らず、
まだ漂流を続けるものと考えている節がある。
バーサーカー霊基であることもあって
状況を把握しきってはいないようだ。

設定画















デザイナーコメント

元々セイバーであってもバーサーカーの気質(?)十分というキャラクターだったので、イメージはしやすかったのを覚えています。水着のバーサーカーは陽気なイメージでしたが、今作では殺伐とした側面を出すように差別化を図りました。デザインとしては、武蔵といえばこのシルエットという和装ベースに雲龍型のしめ縄だったり、変則的なたすき掛けを考えてみたりと楽しくデザインできました。前垂れの水墨画風の龍は渡れいさんにデザインと作画をしていただいてめちゃくちゃ格好良くなったと思います。(こやまひろかず)

紅玉(こうぎょく)の書(しょ)

Crimson Codex

性別 ?　**地域** ?

身長 ?　**体重** ?

設定作成 桜井光・東出祐一郎

CV 茶風林





表情



人物像

奇縁によって海を渡り、
宮本伊織の下へと流れ着いた喋る魔導書。

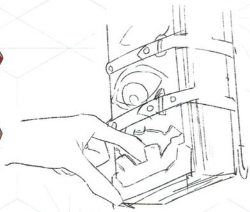
稀少な幻想種であるヒポグリフの皮をなめした
「幻獣の革」で装丁されたアーティファクト。
自身の思考を持ち、感情の籠もった喋りを行うのは、
人間(恐らくは魔術師)の魂を混ぜた疑似人格を
有しているため。
ホムンクルスの類とはまた異なる領域の、
魔術的に創造された知性である。

当然ながら西洋及び魔術に関する深い知見を有しており、
それらに乏しい伊織とタケルのフォローに回ってくれる。

設定画



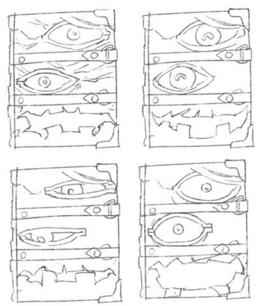












小笠原（おがさわら）カヤ／キャスター

クラス キャスター　**真名** オトタチバナヒメ　**性別** 女
出典 『古事記』『日本書紀』　**地域** 日本
属性 秩序・善　**身長** 143cm　**体重** 41kg

設定作成 東出祐一郎　**キャラクターデザイン** 渡れい
CV 久野美咲



人物像

十五騎目のサーヴァント。
憑依型であるため、実質的には受肉した状態である、
ともいえる。
憑依したサーヴァントはキャスター、
真名は弟橘比売命(オトタチバナヒメ)。

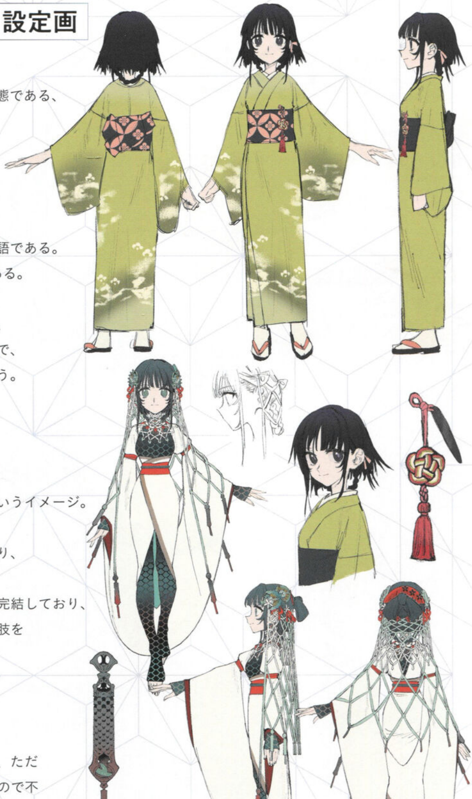
ヤマトタケルの妃であり、
弟とは「年下の」を意味する弟人が変化した語である。
従って、「タチバナヒメ」と称されることもある。

サーヴァントとしては近接戦闘能力がなく、
キャスターとしても支援能力が主となるので、
通常の聖杯戦争で勝ち抜くのは難しいだろう。

小笠原カヤとしては、明るくおしゃま、
兄を慕う可愛らしい妹。
弟橘比売命としては、
ヤマトタケルを慕い続ける一途な少女、というイメージ。

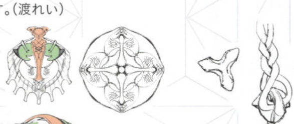
共に召喚されたことは二度とない奇跡であり、
二人もそれを理解している。
その一方、二人の関係は既に生前の時点で完結しており、
だからこそ後ろでそっと見守るという選択肢を
選んだのかもしれない。

設定画

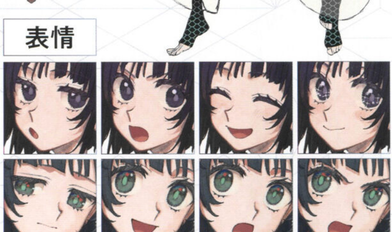


デザイナーコメント

小笠原カヤ:あまり派手にならないように、ただ主人公に寄り添ってくれるキャラクターなので不快感の無いようにと気をつけました。皆さんに可愛がっていただければ嬉しいです。
オトタチバナ:みかんや桃の緩衝材(白いアレ)を被せられている猫の写真をネットで見まして、人につけたらもっと可愛いかなという思いつきから生まれました。頭にぶら下がっているのは投網です。(渡れい)



表情



逸(はぐ)れのセイバー

Rogue Saber

クラス セイバー　真名 木曽義仲　性別 男
出典 史実、『平家物語』『源平盛衰記』など
地域 日本　属性 中立・中庸
身長 178cm　体重 70kg

設定作成 桜井光
キャラクターデザイン しらび
CV 櫻井トオル



表情



人物像

マスターの存在しないサーヴァント。
真名は木曽義仲。
ライダー・源頼光／丑御前と対を成す白色の鎧武者。

召喚直後にライダーに悪鬼の気配を認め、
これを退治すべく奔走し続けた。
互いに知らずにいたことだが、
両騎とも清和源氏に連なる平安の武者である。

本作ではすれ違う形となったが、
実は女武蔵とは少なからぬ縁がある。
かつて女武蔵が駆け抜けた死闘『英霊剣豪七番勝負』に
おける第三の英霊剣豪こそ、誰あろう
義仲の愛妾・巴御前だったのだ。

巴御前は、鬼種―――
人ならざる超常の力を有して生まれた女だった。
ライダーを追い続けたのは、
同じ源氏に連なる武者としての本能以上に、
人ならざるモノを深く知るが故だったのかもしれない。

デザイナーコメント

全体的な方向性は『FGO』でキャラクターデザインをさせていただいた巴御前に合わせ、武者姿をイメージしたものとなっています。『FGO』を先にプレイされている方には鎧を見てこのキャラはまさか？となればいいなと思いつつ、本作で初めて「Fate」に触れる方にもこのデザインで良かったと思ってもらえたら嬉しい限りです。（しらび）

設定画





逸(はぐ)れのアーチャー

Rogue Archer

クラス アーチャー　**真名** アルジュナ　**性別** 男
出典 『マハーバーラタ』　**地域** インド
属性 秩序・中庸　**身長** 177cm　**体重** 72kg

設定作成 東出祐一郎
キャラクターデザイン pako　**CV** 島﨑信長

表情





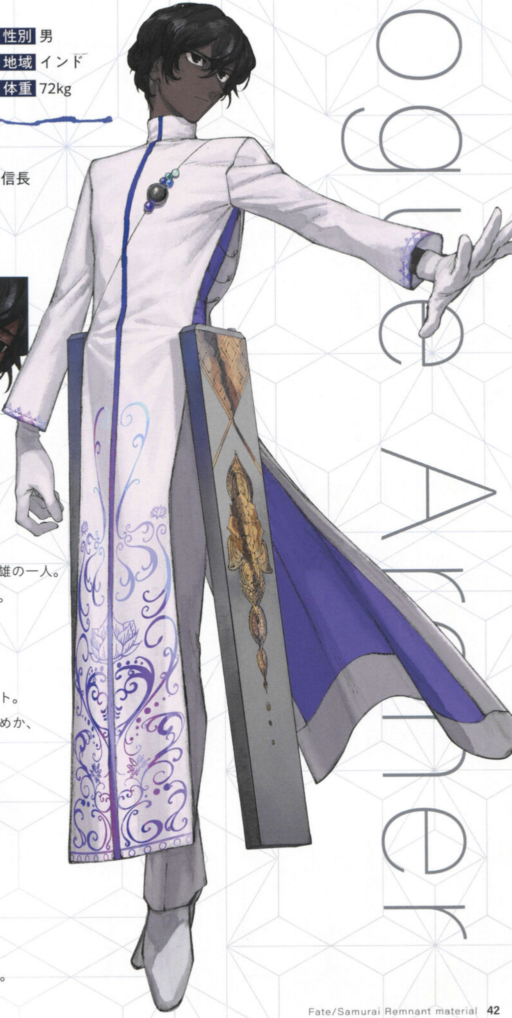
『Fate/Samurai Remnant』における人物像

マスターの存在しないサーヴァント。
真名はアルジュナ。
大叙事詩『マハーバーラタ』に登場する英雄の一人。
本作ではゲストサーヴァントという扱い。

マスターが存在しないため、
土地から離れにくいが、それを除くと
盈月の儀でもトップクラスのサーヴァント。
とはいえ、慣れない土地と時代であるためか、
さすがに弱体化されているようだ。

盈月の儀に興味はないが、
戦闘で後れを取る気は毛頭ない上に、
やや血の気が多い側面がある。

ひとまず様子見をして、
正しい存在が生き残るのであればよし。
そうでないならば悪を倒す矢を放つ。
そういう方針で戦うつもりだったようだ。



逸(はぐ)れのランサー

クラス ランサー　真名 クー・フーリン　性別 男
出典 ケルト神話、アルスター神話　地域 アイルランド
属性 秩序・中庸　身長 185cm　体重 72kg

設定作成 奈須きのこ
キャラクターデザイン 武内崇　CV 神奈延年



表情



『Fate/Samurai Remnant』における人物像

マスターの存在しないサーヴァント。
真名はクー・フーリン。クランの猛犬など数々の異名を持つ。
サーヴァントとしての実力、経験共にトップクラス。
極めて優れた槍兵。
召喚されたからには全力で戦うが、それはそれとして、
現世を楽しむことも忘れない。スタンスとしては
アルジュナに似ているが、彼はより軽やかにあちこちに顔を出す。
個人としての突出した戦闘能力、そして宝具『突き穿つ死翔の槍』(ゲイ・ボルク)により、
対サーヴァントでも対軍勢でも有利に戦いを推し進めることができる。
敵に回すと厄介だが、味方になるとこの上なく頼もしい。

逸（はぐ）れのライダー

Rogue Rider

クラス	ライダー	真名	タマモアリア	性別	女	出典	『Fate/EXTRA CCC』
地域	SE.RA.PH	属性	中立・善	身長	159cm	体重	33kg

設定作成 東出祐一郎　キャラクターデザイン ワダアルコ　CV 斎藤千和

表情







人物像

マスターの存在しないサーヴァント、
真名はタマモアリア。
のんびり口調の恐るべきじゃあくなきつね。

俗に言うタマモナインの一人、もとい一尾。
ふわふわでゆらゆらな態度は、鏡のようなもの。
彼女を怪しいと疑うならば、疑わしく。
彼女を無垢だと思うならば、純真な存在に。
彼女自身は悪事をするつもりはないが、
彼女の周囲にいる人間が勝手に暴走してしまう。
即ち、生粋のトラブルメーカーである。

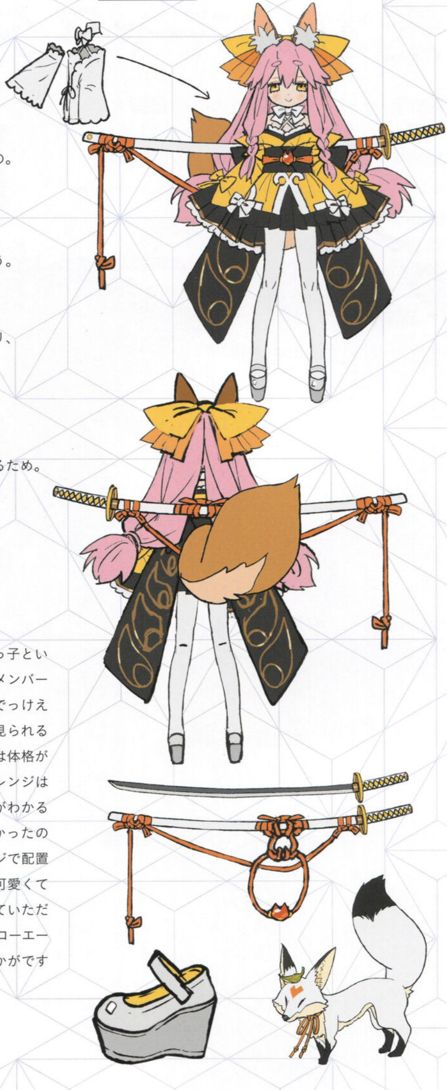
幸い、今回の召喚では伊織にベタ惚れしており、
伊織もそういう意味では極めて無害なので、
目立った暴走はなかったのだが……。

ちなみに彼女がライダーなのは、
多くの人間を操り、その頂点に立つものであるため。
人に乗る、人を踏み台にする、
それを無意識に行ってしまうあたり、
やはり彼女もまた傾国の美女と言えるだろう。

デザイナーコメント

玉藻の前の子供時代ではなく、タマモ族の末っ子というイメージです。玉藻の前の衣装がベースの、メンバーカラーであるイエローのロリータ系お着物＋でっけえ長刀で、小さな体ながら大きめな立ち回りを見られるんじゃないかなと期待……！　他タマモ族とは体格が大幅に違うので、基本衣装にあまり細かいアレンジはいれずにシンプルにタマモの系譜であることがわかる形にしています。「魔女っ子」的な印象も欲しかったので、長刀は魔法使いのほうきのようなイメージで配置してます。他に２パターン出したデザインも可愛くて個人的に気に入ってるので、いつか皆様に見ていただける機会があるといいなと思いますどうですかコーエーテクモゲームスさんタマモアリア追加衣装いかがですか！！？？？（ワダアルコ）

設定画



逸(はぐ)れのキャスター

Rogue Caster

クラス キャスター　**真名** キルケー　**性別** 女
出典 ギリシャ神話　**地域** 欧州
属性 混沌・中庸　**身長** 147cm　**体重** 39kg

設定作成 星空めてお
キャラクターデザイン 左
CV 茜屋日海夏



表情



『Fate/Samurai Remnant』における人物像

マスターの存在しないサーヴァント。
真名はキルケー。ギリシャ神話において、トップクラスの魔術師である。
明るく、朗らか、ややドジ、そして魔女らしい酷薄さと智賢を併せ持つ美少女。
伊織のことが気に入って、愛豚(ピグレット)に変えてしまう暴挙に出る。
お陰でしばらくの間、伊織はブヒブヒと鳴くことになってしまったのであった。
どちらかといえば善良と言えなくもないが、いかんせん魔女の異名を持つサーヴァント。
気を抜けば、気紛れにこちらを豚に変えるなど朝飯前である。
気を付けよ、キャスターには努々油断するべからず。

逸(はぐ)れのアサシン

Rogue Assassin

クラス	アサシン	真名	李書文	性別	男
出典	史実	地域	中国		
属性	中立・悪	身長	166cm	体重	58kg

設定作成 東出祐一郎・奈須きのこ
キャラクターデザイン ワダアルコ
CV 安井邦彦



表情



『Fate/Samurai Remnant』における人物像

マスターの存在しないサーヴァント。
真名は李書文。
江戸時代を舞台とする本作においては、
『未来からやってきた』サーヴァントに当たる。
そのせいか弱体化はしているものの、
本人が功を練った中国拳法の切れ味、
内面の苛烈さも全く変わらない。

盈月の儀は、強者たちと戦う絶好の機会と捉えており、
それこそ餓えた虎のように相手を捜し回っている。

逸(はぐ)れのバーサーカー

Rogue Berserker

クラス バーサーカー　**真名** サムソン
性別 男　**出典**『旧約聖書』
地域 イスラエル　**属性** 中立・善
身長 250cm　**体重** 300kg

設定作成 桜井光
キャラクターデザイン Azusa
CV 遠藤大輔



表情



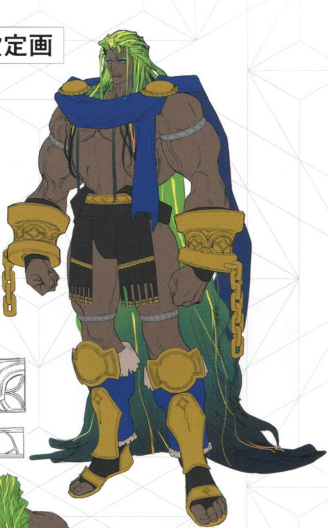
人物像

マスターの存在しないサーヴァント。
真名はサムソン。
吉原を守護する二騎のバーサーカー、その一騎。

殺すためではなく、壊すためではなく、
赦すためにこそ現界した男。
盈月に掛ける願いは「誰かを赦す」こと。
かつて愛したデリラに告げられなかった「赦しの言葉」を
告げねば、と狂化に囚われた精神の内側で考え続けた。

デリラと高尾太夫を混同した訳ではない。
別人であることは理解している。
たとえ自己満足に過ぎないのだとしても、
誰かを赦したいと、無敵の偉丈夫は願ったのだった。

設定画

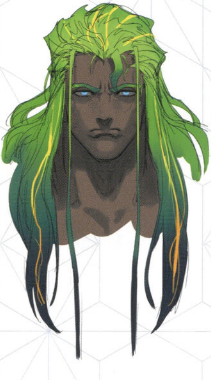






デザイナーコメント

いただいたイメージが「怪力無双！　三メートル近い体躯！　長髪の超人！」でしたので、それはもう存分に筋肉を盛らせていただきました。とても楽しかったです！　逸話になぞらえて引きずるほど長くデザインした髪は、神秘を宿しているイメージとして派手で明るめな色にしました。「寡黙で信仰の篤い男性」という人物像をもとに落ち着いた表情にしつつ、内には激情を秘めているイメージです。(Azusa)









ルーラー

クラス ルーラー　真名 ？　性別 男
出典 ？　地域 ？
属性 混沌・善　身長 182cm　体重 68kg

設定作成 奈須きのこ
衣装デザイン 坂本みねぢ
CV 関智一





設定画

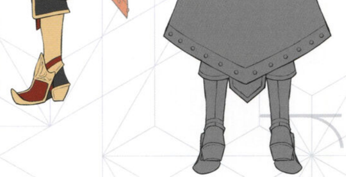


表情



設定画





『Fate/Samurai Remnant』における人物像

マスターの存在しないサーヴァント。
真名は[redacted]。
クラスはルーラー。

縮緬(ちりめん)問屋の若旦那として振る舞っている。
召喚されるなり盈月の儀の真価を見抜き、すぐに
興味を失ってしまった。
裁定者として仕事をするつもりはあまりない。
王様だからね。仕方ないね。

宮本伊織とヤマトタケルのコンビには少し興味を
抱いており、臣下として様々な無茶ぶりをしてくる。

デザイナーコメント

若旦那ということで、遊びに長けている感じが出ると良いなと思ってデザインしました。また、フランクに人と接する時や、時に残忍な所を見せる時にも、様になる格好として機能してると良いなと思います。(坂本みねぢ)



書き下ろし小説

『慶安盈月食録』

原作……TYPE-MOON
著……桜井光・東出祐一郎

Fate/Samurai Remnant material Brand-new Novel

高尾太夫、及びバーサーカーの場合

「ほんと、美味しそうに食べるよねえ。武蔵ちゃん」
頬に手を当てつつ、吐息交じりに高尾太夫は声を掛けていた。
妓楼の二階、大きく開いた障子の先。妓楼一階の屋根に軽く腰掛けて、熱々のつゆがたっぷり入った丼を片手に、蕎麦の麺を勢いよく啜っては唸り、啜っては唸りを繰り返す二本差しの美剣士へと向けて――
「蕎麦ってのは丸いのを囓って幾らだろうに、わざわざ蕎麦切りにしてさ？」
「……本当はうどんにするつもりだったのだけど、うどんは昨日もいただいたので急きょお蕎麦に変更したのです」
美剣士はずずっともう一啜りして、
「うーん、美味しい！」
満面の笑みを浮かべる。
高尾太夫が友誼を結んだバーサーカー、宮本武蔵であった。
「今の私、とっても江戸っ子ね」
「どっちかってえと信州じゃないかねえ。蕎麦切りってのはあっちのもんさね」
「それもそうかしら」
バーサーカーが少し困った風に首を傾げている。
冗談を真に受けているのか、単に納得しているだけなのか。
煙管の煙を吐きつつ、高尾太夫はバーサーカーの透き通った瞳を見つめる。
サーヴァントとして現界する英霊は、飲食不要の存在なのだという。
バーサーカーと出逢った直後、高尾太夫はさる人物からそのように聞かされた。生の煩わしさから解き放たれているならば羨ましくはある、等とその人物は言っていたように覚えているけれど、あまり同意はできなかった。
食事は生きる喜びのひとつだと、高尾太夫は捉えているからだ。
炊きたての白米に香の物、御御御付。佳い。
焼いても生でも、そこに魚がついてくれれば更に佳し、である。
酒もいい。
今夜のように、夜風に当たって煙管をふかしつつ、時折、透き通る清酒の杯を傾ける。
これらの悉くを十全に味わえないのならば、死後の存在である英霊とは、なんと哀れ極まる存在なのだろう、とさえ高尾太夫は想ってしまう。
――いいかい、覚えておいで。
――何を食っても感じなくなっちまったら、人間おしまいだよ。
遊女の先達からさんざん聞かされた言葉だ。
その点、自分の側に立ってくれている彼女、バーサーカーは、英霊でありながら生きた人間のように感じるのかもしれない。
とかく、バーサーカーは食事を重んじるようにして振る舞う。
ただし、多くの場所や時代を旅してきたという言葉通りに、その嗜好は変わっている。
肉を食べたいので、両国まで買ってきていいかと言い出したり――
握り飯を作って欲しいと言ったかと思えば、それを海苔で巻いて欲しいとか。
井戸の水で冷やした牛の乳を飲みたいと言い出すこともあった。
少なくとも――
バーサーカーは、これらの食事から何かを感じている筈なのだ。
「太夫、憂い顔も美人さんだ」
空になった蕎麦の丼を片手に、バーサーカーがからかってくる。
きっとこの後、屋台だかお店だかへ器を返しに行くつもりなのだろう。

高尾太夫は煙管を軽く振りつつ、
「もう。気軽に口説くんじゃないよ。まったく、悪いサーヴァントなんだから」
「なにせバーサーカーですので」
「なんだいそれ」
よく分からない冗談に、笑みを返す。
「憂い顔なもんかね。あたしは、今、武蔵ちゃんのことを考えてたのさ」
「……それってもしかして、口説いてる？」
「ふふ。さあね！」

地右衛門、及びランサーの場合

地右衛門にとって、食事は拷問に等しい。
そも、餓えに餓えた結果として地右衛門の今がある。ものを食う、という行為こそが地右衛門にとっては嫌悪そのものと言っていい。
とはいえ、食わずにはいられない。食わなければ、人は人ではなくなる。優れた術師であれば、食事をせずとも生きる方法があるのかもしれない。
しかし地右衛門はその領域に非ず。地右衛門は、執念のみに特化した術師である。
故に彼は、飯を食う。辛そうな気配は微塵も見せず、もしかしたら本人もそうとは自覚していないのだろうが。
召喚されたランサー、ジャンヌ・ダルクは理解できる。
あれは拷問だと。
味覚は壊れている。握り飯を食べる度食べる度、否応なく餓えた時代を思い出す。それを振り払っても、次に襲いかかるのは幻覚症状だ。
――なぜ、お前は、飯を食えている。
――どうして、お前は、生きている。
常人であれば、否、常人以上の精神であっても砕け散るようにおぞましい情景を前に、地右衛門の態度に揺るぎはない。
食うというよりは詰め込む。ぎゅうぎゅうと、ただひたすらに。それは苦痛と絶望、憎悪と痛癪を飲み込むような光景だった。

「何を見ていやがる」
「食事の、」
「あん？」
「食事の時間は、もう少し穏やかに過ごすべきでしょう」
「ハ。面白ェ理屈だ。生憎とな、生まれてこの方、俺は食事なんかしたことがねェ」
「……」
地右衛門の言葉は正しい。
生まれてすぐに餓えて、成長したのが奇跡的というほどに餓えて、いつも顔を寄せ合い、救いを求め、餓えて、なのに奪われて、家族は死に、そして絶望の果てに憎悪を刻んだ。
家族で寄せ集まってしたアレは、断じて食事ではない。
あんな辛い、過酷なものは、断じてだ。
そしてそれは今も続いている。自分はきっと、一生涯食事というものに出会えないという確信がある。
心の籠もった料理など要らない。栄養など要らない。それは自分の人生において、ただの障害に過ぎない。
「祈るなよ、ランサー。テメェの為に祈るのは勝手だが、俺の為に祈るな」

「――分かっています」
それきり地右衛門は自身のサーヴァントから関心を失ったようだった。今は体力の回復中。非戦闘時であり、潜伏中。
つまり、地右衛門にとってサーヴァントに用はない。霊体化して自身を護衛するなら、それだけで良い。
「消えろ」
「はい」
粛々とランサーはその命令に従い、姿を消した。廃寺の仏殿で、地右衛門はごろりと横になる。空腹が満たされた訳ではない。この空腹は、永遠に満たされることのないもの。
それを辛いと思う感覚すら、地右衛門には存在しない。
彼には、生きるために必要な欲望が根底から欠落しているのだから。

―

地右衛門はその身を横たえたまま、壊れた味覚のままに握り飯を喰らう。
霊体化したランサーはそれを見守りながら、この戦いの行く末を理解する。
結末は変わらない。
勝っても負けても、地右衛門という男に待つのは破滅のみ。
ならばその破滅の道程に付き合うのが、サーヴァントとしての在り方だ。
間違っている、歪んでいる、そう思われても仕方はない。だが――
地右衛門もランサーも、もうそれ以外の生き方など理解できない。
地右衛門は食事をしたことがない。
これまでも、そしてこれからも。

鄭成功、及びアーチャーの場合

「ふむ、故郷の味だ」
鄭成功は頷きながら、食事を口に運んでいた。彼のサーヴァント、アーチャーは楽しそうに食事をする己がマスターを、何とはなしに眺めている。
「そういえばアーチャー」
「うん？」
「おまえの時代の料理、いかなものであった？」
「料理とは時代の積み重ねによって築き上げるもの。我らが郷土とて今より千年も前となれば流石に技術面では一歩譲るだろうな」
「ほほう。孫呉の都督、周瑜がそう言うのであれば曹操、劉備でも事情は変わらんか」
「とはいえ、原始的であったとしても原型は変わりない。この時代に食べられているものの幾つかは、私が生きていた時代にも馴染みあるものだ」
互いの視線に油断はなく、逆に軽い不信がある。
召喚されて日は浅く、マスターとして、あるいはサーヴァントとして、共に未熟な段階である。
盈月の儀、と呼ばれる特殊な聖杯戦争でもマスターとサーヴァントの在り方は変わりがない。だが、時代と状況が互いの不信を招いていた。
鄭成功も周瑜も、共に優れた将であるからこその不信。
我がサーヴァントは／我がマスターは、共に戦うに相応しい存在なのか？
供給される魔力でマスターの力量は量ることができる。ステータスを観測することによって、サーヴァントがどれほどの強さかは理解できる。

しかし、結局のところマスターとサーヴァントの関係はそれだけでは結びつかない。性能を信じることはできても、心を信じることは難しいからだ。

そして鄭成功もアーチャーも聡い。このままではいられないことも分かっている。盈月の儀を勝ち抜くためには、互いに『信』を得ることが必要であると。

鄭成功はしばし考えて、閃いた。

「アーチャー、頼みがあるのだが。いいか？」

「うん？ それはマスターとしての命か？」

「いや、少し違うな。……国を同じくする者であり、遙か過去を生きてきたおまえにしかできない事だ」

「それは……」

鄭成功は机にあった酒瓶を差し出した。

「一杯飲め、我がサーヴァント」

「……ふむ、了解した。我がマスター」

アーチャーは対面の席に座り、与えられた猪口に注がれた酒を眺める。

「故郷のものではなく、こちらの国の酒さ」

「濁りはないか。時代を変遷すれば、酒も変わるものだ」

「ああ、おまえの時代は濁り酒が主流だったか」

「都督といえども、戦場に赴けば酒は兵と同じよ」

「酒飲みで有名なのは、蜀の張飛だったか」

「まあ、あれは創作だがな。とはいえ私の生きた時代は、ああいう大酒飲みでなければ兵に慕われることはなかったのさ」

「なるほどね」

アーチャーは酒を一口飲み、微かな驚きに目を細めた。

「美味いものだな」

「だろう？ 海を一つ隔てただけで、酒も料理もこうも変わる。何とまあ、世界は驚きに満ちていることか」

「そうだな。知識が与えられているとはいえ、経験は別か……」

飲み終えたアーチャーが、ほうと夜空に向けて息を吐く。

幽玄の美を感じさせる息であり、同時に生の実感を抱かせるものであった。アーチャー、三国時代を駆け抜けた傑物の一人、周瑜。

彼はこの江戸に、確かな実体を以て存在している。マスターである鄭成功に、そう思わせるに足る呼吸だった。

そうか、と鄭成功は思う。

召喚してから、たった今まで。もしかすると、自分はアーチャーを亡霊のようなものと思っていたのかもしれない。

もちろん、それは半分正解だ。サーヴァント――彼ら彼女らは過去の記録、過去の概念であるのだから。

だが酒を飲み、美味さに目を細め、そして感嘆の息を吐き出す彼は、やはり半ば生者でもあるのだ。そう、目の前にいるのは英傑であって神ではない。

「――よし、それでは腹を割って話そうか！」

それが分かれば、鄭成功に恐れはない。

知勇兼備の将軍を、自分に惚れさせてみせる。その程度のこと成し得ずして、何が国の再興であろうか。

「さてさて。割る腹が私にあるものか……」

アーチャーとて、そう切り出した鄭成功の内心は読めている。これがどこかの増長な君主――たとえば皇帝を僭称した、あの袁術であれば直ちに遠ざけるところであるが。

「だが、この酒は悪くない」

悪くない、とアーチャーは思う。酒も、食事も、そして……目の前の、国の再興を願う、

若き英雄も。
召喚されてから、心のどこかにあった隔意が溶けていくのを感じながら、アーチャーは腹を割って話し出す鄭成功に微笑んだ。

ドロテア・コイエット、及びアサシンの場合

ドロテア・コイエットは貴族の自覚を有している。
スウェーデン貴族として、だけの意味ではない。
多くの魔術師は自らを貴族と称するものだ。
豊富な資産に広大な領土を有し、常人には想像もつかない高度な神秘を身に修め、時に力としてさえ行使する魔術師たちは、事実上、人間の上位にあたる存在だ。貴族という呼称は、正鵠を射ていると言うべきかもしれない。
ならば、上位の者に相応しいものを口にせねばならない。
たとえば朝食。
極東の異国であろうと焼きたてのパンは必須である。
ハムとチーズ、それにパンに塗るためのバターも当然ながら欲しい。
「焼きたての小麦のパンに、チーズはゴーダが良いかしら。ハムとバターも当然。ああ、卵料理をどうするかはアナタたちに任せるわ」
父であるフレデリック・コイエットの日本渡航に同行することを決めた日の朝、彼女は自分の朝食の献立として以上の言葉を告げたという。
――無理難題である。

パン。これは難易度があまり高くない。
当然ながら小麦のパンでなくてはならない、とは家宰ジョバンニの発言である。
ライ麦や玉蜀黍で作るパンもあるし、オランダではライ麦のパンが好まれはするものの、ドロテアの好みは小麦の柔らかいパンであった。稲作ほどの規模ではないにせよ、日本に於いても小麦は生産されている。
カステラ作りに比べれば、まだ材料を集めやすいだろう。
むしろ、パンを焼くならパン窯こそ肝心だ。速やかに現地で組み上げるべし。

チーズ。バター。この時代、日本で乳製品を口にするのはとても難しい。
乳製品の概念が渡ってきたのは遠く七世紀、飛鳥時代のことだが、本格的な酪農が始まるまでは慶安の世から数十年を待つ必要がある。
ゴーダチーズのような保存のきく硬いチーズであってさえ、長期間の船旅を経ることを鑑みれば、日本で口にするのは難しい。
ならば農作業用の牛から乳を取り、一から作るより他になし。

ハム。特にドロテアが好むのは豚肉を用いたものである。
仏教伝来に伴う肉食の忌避によって、日本から養豚の文化は途絶えつつあり、牛の乳以上に入手に困難を極めるものと想われたが……救世主は、薩摩藩にあった。今世紀初頭の琉球侵攻の折、薩摩は多くの食用豚を持ち帰っており、慶安の世である現在に至るまで、豚に限るとはいえ肉食文化が根付いているという。
薩摩で豚を買い付ければ、ハムを作ることは不可能ではない。
或いはフォルモサに行かねばならぬ、と考えていた家宰は胸を撫で下ろしたとか。

卵。これは最も材料を集めるのが容易だ。
日本には鶏鳴を時計代わりに用いるため家鶏が普及しており、卵も入手しやすい。

――以上。
家宰をはじめとする数多の配下の尽力でもって、ドロテア・コイエットにとってはほんの日常の一部にすぎない、しかし貴重で特別な『朝食』が完成するのである。

「今朝の卵料理は？」
「ポーチドエッグにございます」
「そう」
ある朝のこと。
家宰との軽いやり取りの後、優美に、ドロテア・コイエットは朝食を始めて――
傍らに控える巨躯のアサシン、甲賀三郎へと言葉を掛けていた。
「今日の哨戒は、少し範囲を広げて頂戴。そろそろ戦闘を意識しておきましょう」
超常の存在、神秘の具現とも言うべきサーヴァントの行使にもまるで躊躇がない。
これこそがドロテア・コイエット。生まれながらに貴族の自覚を持ち、他者を統べて、領土と民に責務を持つ、王者の気風を有する者。
見事な振る舞いである。
自らの子孫にも見せてやりたいと思う程の、堂々たる姿であった。
「アサシン、何か？」
「いいや。些か考え事をな」
「そう」
ドロテアは少し考える素振りをして、
「……神性を持った英霊の抵抗力を侮るつもりはないけれど、隠し事をするなら、魔術で明かしてしまうから、覚悟なさいな」
「ふふ。面白いことを云う姫だ」
「姫はやめて」
吐息をひとつ。
それから、ポーチドエッグを口にして。ぽつりと一言。
「あら。今日の卵料理、美味しいわ」

……後に。
家宰ジョバンニからこの言葉を伝え聞いた料理人は感涙に噎び、この日を特別な記念日として、子々孫々に至るまで尊ぶようにと、我が子に言い聞かせたという。

土御門泰広、及びキャスターの場合

「不味い」
土御門泰広はため息をつきながら、箸を延ばす。
「不味い、不味い、不味い……」
御御御付（おみおつけ）、香の物、白米、旬の魚を使った刺身、江戸においてはどれも基本な料理であり、質は悪くない。少なくとも、庶民の食うそれよりは遥かに上質だ。
零落したといっても名門土御門家、真っ当な人間であれば好悪はあれど、食事の質と量において不満が出るはずもない。では、彼の味覚が壊れているのか？　そうではない。
土御門泰広が食事の不満を訴えるのは別の理、別の感情がある。

土御門泰広は、全てが不満なのだ。
今の状況も、閉塞した江戸も、零落した自分たちも、何もかも全て。
どれほどの美味極まる料理であっても、精神がそれを味わうに至らなければ、無意味なものでしかない。
故にその新鮮な材料も、粋を極めた技術も、土御門泰広にとっては不味いものになる。
それでも食わねばならぬ。それは栄養補給というよりも、名門としての在り方だ。彼の不味い、という言葉も誰にも聞こえてはならない。
「――我がマスターながら、哀れなものだ」
キャスター、稗田阿礼はそう言って隣室の土御門泰広を突き放す。キャスターの鋭敏な思考は、土御門泰広の内心の奥の奥まで踏み込み、暴き立てる。
矮小にして脆弱。だが、その誇りは理解できる。できてしまう。
彼の願いは、彼の現状に対する不満は――紛れもない本心だ。
庶民が食べようとしても望めない、一級の料理を食しても不味いと本気で思っている。
彼が食事を美味いと思えるようになるには、盈月の儀に託した願いを叶えるしかない。
名門土御門家の再興を果たし、周囲から崇拝の眼差しを手向けられるようになるまで、彼は全てを不味いと思い続けるのだろう。
そこまで追い込まれているのだ、土御門は。
どれほど幕府相手に余裕を見せても、どれほど敵を蔑んでも、心が安らかになることなど一つとてない。
執念深い猫に追い回される鼠のように。彼の焦燥は生半可なものではない。
「だが、それでいいぞ土御門。おまえの劣等感こそが、盈月の儀を勝ち抜くために必要なのだからな」
劣等感、傲慢さ、そして何よりその臆病さが素晴らしいとキャスターは笑う。
修羅と羅刹が殺し合うこの盈月の儀において、勝つことは即ち生き残ることなのだから。
土御門泰広は「不味い、不味い」と呻きながら陰謀を巡らせていく。
この食事が、いつか美味いものになることを願いながら。

由井正雪、及びライダーの場合

「ありがとう、今朝も美味だった」
由井正雪は朝の涼やかさの中で、煌めきを纏うようだった。
膳を下げに来た女中が半呼吸の間、動きを止めてしまった理由は想像に難くない。見惚れてしまったのだ。
透き通るように白い肌、朝露に濡れたかの如く憂いを帯びた瞳、儚げな唇――
色素の薄い身に生まれついた由井正雪であるが、特に早朝は、この世のものならざる美しさを纏うというのが、身の回りの世話をする女中たち及び、ごく一部の門下生の間にのみ知られる事柄であった。
天上の美に僅かに酔いしれる女中はしかし、次の瞬間には、落胆を顔に浮かべる。
今朝も。由井正雪の膳は、僅かしか減っていないのだ。
それも、汁を、ほんの少しだけ。
他には何も。
白米にも、香の物にも、貴重な塩引き鮭の切り身にも手を付けてもいない。
「すみません、すみません。正雪さまのお口に、合いませんで……」

「そんなことはない」
由井正雪は、真摯の瞳で女中を見据えて、
「小食は、生来よりの性分が故のこと。どうか、毎朝の無礼を許して欲しい。貴殿らには、いつも感謝している」
それが真実であるかのように、まっすぐに伝えていた。

「……何とも罪深いマスターでおられる」
ライダー、源頼光は霊体化を解きながら肩を竦ませる。
哀れなものでも眺めるように、赤面しながら涙さえ流して小走りに去って行った女中の方向へと顔を向けつつ、
「あれは傍惚れでしょう。酷なことを」
黒色の面頬越しに由井正雪へと言葉を掛ける。

ライダーの言葉には一理ある。
女中にせよ門下生にせよ、忠心や友情を超えた熱を秘めて視線を向けてくる人間たちに対して、由井正雪は、ある種の罪悪感を抱き続けている。
第一に、自分は天然自然に生まれ落ちた命ではなく、人造にして贋造の生命、西洋魔術で呼ぶところのホムンクルスの亜種である。人間同士、同種同士では、ないのだ。そのことを彼らは知らない。
第二に、自分は——
「貴女の命は短い。世をただすのであれば……」
「無論。私は、盈月を得て世の歪みを正す。そのためだけに、私は在る」

——短命なのだ。
既に、由井正雪の肉体は稼動限界に達しつつある。
生来の小食と口にしたのは嘘偽り。
最早、死を待ちつつある状態にある体は最早、食事を必要としないだけだ。
滋養として吸収されないことが明確である以上、せめて口を付けず、他の誰かの膳に並んでくれることを祈るより他になく。

由井正雪は食事をしない。
ただ、己が願いの成就のため、その心身のすべてを捧げて儀を勝ち抜くのみ。

宮本伊織、及びセイバーの場合

一汁一菜。
御御御付に魚の干物ないし香の物。
後はそう、椀によそった白米か、握り飯があればそれ以上は望むべくもなし——
宮本伊織にとっての食事とは、およそ、こういったものであろう。
一見すれば不自然さを感じはしないだろうが、その実、無味乾燥の体現に他ならない。
良い飯というのは、滋養充分にして規定時間の稼動に足る量を指す。
滋養の補給にして、戦いの装置としての自己を稼動させるために必要な資源であり、そこに感情を差し挟む余地はない。
旨いものは旨いし、不味いものは不味いけれど、そこに評価を見出すことはない。

ただ冷徹に、摂取するものとしての一汁一菜。
それが宮本伊織の食事なのだ。
もっとも、本人が口にした訳ではない。あくまでセイバー、ヤマトタケルがこの数日の観察を以て感じ取った上での考えなのだが……
当たらずといえども遠からずの予感はあった。
今朝もそうだ。
伊織は、淡々と口に入れて、咀嚼して、呑み込むばかり。
味わうということをせず、何かを感じることもない。
こちらが旨いと言えば、そうだな、と手短に言葉を返してくるものの、それだけだ。
時折思い出したように、敵とはいえど人を斬り殺してはならん、決死の兵(つわもの)や練達の刺客であれば止むを得まいが、そうでなければ避けねばならん、と独り言のように告げるばかり。
あれほど旨いコメを、程よく塩加減のきいた握り飯を何個口にしても、あの朴念仁は微笑のひとつも浮かべない。
木彫りの像でさえ、もう少しくらいは感慨を浮かべようものを。
「どうした、セイバー」
「うん」
「ん?」
「イオリはあれだな。割と、つまらない人生を送ってしまっているのだな、と」
想ったままを言った。
些か、意味合いが異なるように受け取られそうではある。
「……随分だな。何だ、朝餉が気に入らなかったのか。昨日と同じ献立の筈だぞ」
「うん、美味しい」
「なら何故、急に俺をなじったりする」
「んー」
やはり、きちんと伝わらなかった。
毎朝こんなにも美味な朝餉をいただける環境に暮らしているというのに、そこにさしたる価値を見出さない人生というのは、あまりに勿体ない。きっとその勿体なさにも気付いていないのだろうから、なんとも、つまらない人生を送ってしまっているのだな——
この刹那のセイバーの思考を詳細に言語化すれば、こうなる。
だが失敗してしまった。
セイバーは生来、口が上手い方ではないのだった。
今に限らず——
しばしば、結論を口にしがちなのだ。
あまり言語での意思の伝達を必要とせずに育ったから、とは言えるだろうか。
父王や兄王子たちが発する言葉は指示や命令ばかりで、この唇から出るのは、承知の意を示す短い語句ばかり。
同年代の少年少女に交わって遊ぶこともなく、気付けば、手には剣を握っていた。
端的な結論ばかりを口にする殺戮の装置を周囲は腫れ物のように扱って、いつも、セイバーはひとりでいたように記憶している。戦時、平時の区別なく。食事の時であれ、そういえば他者とこんな風に話しながら、というのは少なかったかもしれない。
そんな日々が変わったのは——
そう、愛するひとに出逢ってからだ。
剣を振ることも、息を吸うことも、空を見ることも、地に立つことも。
すべてが。変化した。

戦うための滋養の補給に過ぎなかった食事の意味さえがらりと変わったのだった。
「……急に黙ったかと思えば、急に破顔してみせる。貴殿は分からんな、セイバー」
「ふふ。美しいものを思い出したのだ」
「食事時にか?」
「食事時だからだよ、イオリ」
そう言って、セイバーは柔らかく微笑む。

セイバーにとっての食事とは——
感じることである。
炊きあげた白米の艶めきに、噛みしめた時の甘みに、さまざまなものを感じ取る。
中天に輝くあたたかな太陽を。
大地に根ざして生きる民草を。
そして、それらのすべてを尊び、守るべきであるものとして——善の何たるかを教えてくれた、今は遠き彼方に在りし、穏やかな笑顔をこそ感じ、想うのだ。
本質的には飲食を不要とするサーヴァントの身にあって、セイバーが事ある毎にコメを欲する理由がこれだ。
決して滋養としての食事を得ている訳ではない。
けれど食事のたびに、あの日の愛を俄に思い出し、心身を賦活させている。
白米の一粒ごと。
噛みしめる味わいごと。

——愛で、セイバーは戦うのだ。



Fate/Samurai Remnant material

発行日
2023年9月28日

監修
Ω-Force　シブサワ・コウ　TYPE-MOON　ANIPLEX

テキスト
桜井光　東出祐一郎

イラストレーション
渡れい
Azusa　こやまひろかず
坂本みねぢ　しらび
武内崇　danciao
pako　本庄雷太
森井しづき　ワダアルコ
コーエーテクモゲームス CG部

企画
コーエーテクモゲームス IP商品部

編集
コーエーテクモゲームス シナリオ制作部

表紙デザイン
コーエーテクモゲームス クリエイティブスタジオ

本文デザイン
plgraphics 石川明子

印刷・製本
図書印刷株式会社

Printed in Japan.

Fate/
Samurai Remnant
material

原創短篇小說中譯本

慶安盈月食錄

原作：TYPE-MOON
作者：櫻井光、東出祐一郎

高尾太夫與 Berserker

「妳吃得可眞是津津有味呢，武藏。」

高尾太夫手撐著臉頰，語帶嘆息地搭話道。

她對著青樓二樓拉門大開的另一頭，輕坐在青樓一樓的屋頂上，單手捧著裝滿熱騰騰醬汁的大碗公，不斷大口吸著蕎麥麵，還不時發出嘖嘖驚嘆，腰間插著雙刀的美劍士說道——

「蕎麥這種東西，做成麵餅來吃不好嗎？怎麼還特地切成麵條呢？」

「……本來是要吃烏龍麵的，只不過昨天吃過了，所以臨時改成蕎麥麵。」

美劍士又簌簌地再吸了一口。

「嗯——眞好吃！」

接著露出滿臉的笑容。

她是與高尾太夫結下友誼的Berserker，宮本武藏。

「我現在很像江戶人呢。」

「眞要說應該是信州吧？蕎麥麵是那邊的名產啊。」

「這麼說好像也是呢。」

Berserker 有些傷腦筋似地歪了歪頭。

究竟是把這番玩笑話當眞了，抑或只是單純接受了她的說法呢？

高尾太夫吐出煙管的煙，一邊看著 Berserker 澄澈的眼睛。

以從者身分現界的英靈，據說並不需要飲食。

就在與 Berserker 相遇後不久，高尾太夫從某人口中聽說了這件事。雖然記得那人說過，若是如此便能擺脫生命的煩瑣桎梏，倒也頗令人羨慕，但她實在難以認同。

因爲高尾太夫認爲，飲食就是生命中的一大喜悅。

剛煮好的白米飯配上醃菜，再來一碗味噌湯，堪稱絕配。

如果可以再來一尾魚就更好了，不論是烤過還是生食。

酒當然也是。

就如今晚一般，在晚風中抽著煙管，時不時再啜飲一杯晶瑩透亮的清酒。

身爲死後亡魂的英靈，無法玩味凡此種種，可說是悲哀至極吧，高尾太夫不禁這麼想。

——聽著，妳要好好記住。

——如果吃什麼都毫無感觸，人生可就完了。

這是遊女前輩們再三強調的話。

就這方面來說，Berserker ——站在自己身旁的這女孩，雖是英

靈，卻能像活人一樣感受也說不定。

總之，Berserker 表現得相當注重飲食的樣子。

只不過，正如同她說自己曾旅行過許多地方與時代，她的喜好著實頗與衆不同。

像是嚷著想吃肉，問太夫她能不能去兩國買肉回來——

或是拜託太夫做飯糰，卻又要求用海苔把它捲起來。

還曾說過想喝用井水冷卻過的牛乳。

至少——

Berserker 從這些飲食當中，應該有感受到些什麼吧。

「太夫，妳憂愁的表情也很美呢。」

單手拿著已經空了的蕎麥麵碗，Berserker 如此調侃道。

她待會就要動身將麵碗拿去歸還給攤販或是店家吧。

高尾太夫輕揮了揮煙管。

「眞是的，少隨便調戲人家了。妳這個從者可眞壞。」

「畢竟我是 Berserker 嘛。」

「這算什麼理由。」

她以笑容回應了不明所以的玩笑話。

「憂愁的表情嗎?我啊，剛剛在想武藏的事喔。」

「……妳這話，難道是在調戲我嗎?」

「呵呵，妳說呢!」

地右衛門與 Lancer

對地右衛門而言，飲食形同拷問。

往昔的飢餓塑造了地右衛門。他可說是打從心底厭惡進食這項行爲本身。

儘管如此，他也不得不吃。不吃東西，人就無法爲人。若是優秀的術師，或許能有無須進食也能生存的方法也說不定。

只不過那並非地右衛門所長。地右衛門是只專精於執念的術師。

所以他要吃飯。或許他本人也沒有自覺吧，他不曾顯露出一絲一毫難受的樣子。

但他所召喚的 Lancer ——貞德則能理解。

她能理解那是一種拷問。

味覺早已毀壞不堪。每每吃著飯糰時，便不禁想起那段挨餓的歲月。就算將它拋諸腦後，幻覺仍會緊接著襲來。

——爲什麼，你還能吃著飯？

——爲什麼，你還活著？

面對若是常人……不，是即使擁有超乎常人精神也無法承受的恐怖情景，地右衛門的態度也依然毫無動搖。

與其說是在吃，不如說是裝塡。僅是往體內不停地塞，塞得滿滿的。那模樣就宛如是在吞噬痛苦、絕望、憎惡與發狂一般。

「妳看什麼看？」

「用餐的……」

「啊？」

「用餐的時光，應該是更安穩祥和的才對吧。」

「哈，妳這話說得有趣。但抱歉啦，畢竟我可是打從出生都沒用過餐啊。」

「……」

地右衛門說得沒錯。

一出生就挨餓，餓到能長大都堪稱奇蹟。總是臉湊著臉地擠成一塊、尋求救贖、忍受飢餓，卻又橫遭剝奪、家人死去，最終在絕望的盡頭刻下憎恨。

家人聚在一起做的那件事，絕非用餐。

那種痛苦殘酷的事，絕對不會是。

而那也延續至今，他確信自己一輩子都與用餐這事無緣。

不需要什麼用心製作的料理，也不需要營養，那在自己的人生中，不過是阻礙罷了。

「不要祈禱，Lancer。妳想爲自己祈禱那是妳家的事，但不要爲了我祈禱。」

「——我明白。」

說完，地右衛門便彷彿對自己的從者失去了興趣。現在是養精蓄銳的時刻，是休兵潛伏的時候。

換言之，現在的地右衛門並不需要從者爲他多做些什麼，只要能化爲靈體保護自己便足矣。

「消失吧。」

「是。」

Lancer 遵照命令消失了。地右衛門在廢寺的佛殿裡躺了下來，空腹沒有被塡滿，這股空腹感，永遠也不會被塡滿。

地右衛門甚至沒有對此感到難受的情感。

因爲他打從根本欠缺活著所需的慾望。

地右衛門橫躺著，用壞掉的味覺啃著飯糰。

靈體化的 Lancer 守望著他，同時領悟了這場戰鬥最終的結局。

結果不會有任何改變。

無論是勝是敗，等待著這名爲地右衛門的男子的，都只有毀滅一途。

既然如此，陪他走完這條通向毀滅的不歸路，便是她身爲從者的使命。

這是多麼荒謬、多麼扭曲，就算旁人如此作想也莫可奈何。然而——

無論是地右衛門還是 Lancer，都無法理解除此之外的生存之道。

地右衛門不曾用過餐。

至今如此，往後亦復如是。

鄭成功與 Archer

「呼，是故鄉的味道。」

鄭成功點了點頭，一邊把餐點送入口中。他的從者 Archer 則是漫不經心地望著正開心享用餐點的御主。

「話說回來，Archer。」

「嗯？」

「在你的時代，有什麼樣的料理啊？」

「料理是時代積澱而成的產物。我等生前的故鄉，距今畢竟已有千年，在技術面上終究還是差了現世一截吧。」

「哦？既然孫吳的都督周瑜都這麼說了，看來就算換作是曹操、劉備，答案也是一樣的吧。」

「不過，即便原始，但原型終究是不變的。這個時代食用的食物中，也多少有些是在我生前的時代便很熟悉的。」

彼此的視線沒有絲毫鬆懈，反而隱含著淡淡的不信任感。

召喚至今仍未過許久，雙方身爲御主與從者，彼此都還在摸索的階段。

即使是在盈月之儀這般特殊的聖杯戰爭，御主與從者的本質也依然沒有改變。但是，時代與狀況卻爲彼此帶來了不信任感。

正因鄭成功與周瑜皆是優秀的將軍，才因此產生了懷疑。

我的從者／我的御主，足以與我並肩而戰嗎？

藉由供給的魔力可推量御主的力量，透過觀測的數值可知曉從者的強度。

但是，御主與從者的關係終究不是單憑這樣便能維繫。

因爲就算能相信性能，也很難信任對方的內心。

而鄭成功與 Archer 都是聰明人，彼此都清楚保持現狀絕非良策。要在盈月之儀中得勝，就必須互相博得對方的「信任」。

鄭成功思忖片刻，突然冒出了一個想法。

「Archer，我有件事想拜託你，可以嗎？」

「嗯？你是以御主的身分命令我嗎？」

「不，不完全是那樣……這是跟我來自同樣國度，卻曾經活在遙遠過去的你，才能完成的事。」

「那是……」

鄭成功遞出桌上的酒瓶。

「喝一杯吧，我的從者啊。」

「……嗯，我明白了，我的御主。」

Archer 坐到對面的位子，望著鄭成功遞給他的酒。

「這不是我們故鄉的，而是這個國家的酒。」

「不見一絲混濁，隨著時代變遷，酒也會變呢。」

「啊，在你的時代濁酒才是主流嗎？」

「縱使是都督，只要上了沙場，也只能喝跟士兵一樣的酒。」

「我記得那有名的酒豪，是蜀國的張飛來著嗎？」

「是啊，雖然那只是杜撰，但在我生活的時代，若沒有那般酒量，可得不到士兵的愛戴。」

「是這樣啊。」

Archer 將酒一飲而盡，驚訝地微微瞇起眼睛。

「眞是美味。」

「是吧？不管是酒還是料理，僅是隔著一片大海，便如此不同。世界可眞是充滿驚奇啊。」

「是啊。雖說被賦予了知識，但實際體驗又是另一回事……」

Archer 飲畢了酒，朝夜空大嘆一口氣。

那是一股散發幽玄之美，卻又同時令人感受到生命存在的嘆息。

Archer，是在三國時代馳騁無數的一大英傑——周瑜。

這一口嘆息，已足夠讓身爲御主的鄭成功意識到他確實是以實體存在於這座江戶。

原來如此，鄭成功心想。

從召喚以來至今，自己或許都把 Archer 當成了亡靈般的存在。

當然，這個想法並不算錯。因爲從者——他又或者是她，都是過去的紀錄、過去的概念。

但是，飲著美酒、爲酒的美味而笑並且吐出感嘆之氣的他，果然同時也是半個活人。是的，位於眼前的，是一位英雄，而不是神。

「——好，那就打開天窗說亮話吧！」

只要明白了這點，鄭成功便無須害怕。

他要讓這位智勇兼備的將軍信服於他。若連這種程度的事都辦不到，又談何復興國家。

「唉呀，我可有什麼需要坦白的嗎……」

Archer 也讀懂了鄭成功話中的想法，這要是哪個狂妄的君主——例如那僭稱皇帝的袁術，他可就要立刻拒之千里了。

「不過，這酒還不錯呢。」

眞是不錯，Archer 心想。酒、食物……還有眼前這位，冀望著復興國家的年輕英雄也是。

感受到從召喚以來便存在於心中某處的隔閡即將化解，Archer 對毫不保留地向他開誠布公的鄭成功露出微笑。

多羅蒂婭・科耶特與 Assassin

多羅蒂婭・科耶特有著貴族的自覺。

這並非單純指其瑞典貴族的身分。

多數魔術師皆會以貴族自稱。

魔術師們擁有豐富資產與廣大領地，修習超乎常人想像的高等神秘，甚至將其化爲力量使用，實質上可說是高於凡人一等。因此貴族似乎是個十分貼切的稱呼。

既是如此，她所享用的食物也必須與符合上位者的身分才行。

以早餐爲例。

儘管在極東的異國，剛出爐的麵包仍是不可或缺的。

她當然也想吃火腿、乳酪，以及塗抹於麵包上的奶油。

「剛出爐的小麥麵包，配上豪達乳酪應該不錯。當然也要火腿與奶油。啊，雞蛋料理就交由你們安排了。」

據說在她決定與父親佛雷德里克・科耶特搭船前往日本的那天早晨，她提出了以上內容作爲自己的早餐菜單。

——這實在過於強人所難。

首先是麵包。這倒不會太難取得。

不過管家喬瓦尼說了，當然得是小麥麵包才行。

有些麵包是以裸麥或玉蜀黍製成，雖然荷蘭人偏好裸麥麵包，但多羅蒂婭喜歡的是小麥製成的柔軟麵包。雖不及稻作般的規模，不過小麥在日本亦有生產。

與製作長崎蛋糕相比，材料可說是相對容易湊齊吧。

倒不如說，要烤麵包最重要的是麵包窯爐，必須儘速在當地建造才行。

接著是乳酪與奶油。這時代在日本要嘗到乳製品極爲困難。

雖說早在七世紀——亦即飛鳥時代，乳製品的概念便已傳入日本，但從慶安時代仍須等待數十年，酪農業才算正式開始發展。

即使是豪達乳酪這種適合保存的硬乳酪，有鑑於必須經過長途航路，也很難在日本嘗到。

因此，唯有從耕牛身上取得乳汁並從頭製作一途。

再來是火腿，尤其是多羅蒂婭喜歡的豬肉火腿。

由於忌食肉類的觀念隨著佛教傳入，養豬文化逐漸消失於日本，取得豬肉的難度甚至比牛乳還要困難許多……幸好在薩摩藩出現了救星。在本世紀初，薩摩於征伐琉球時帶回了許多食用豬，直到今日慶安時代，即使僅限於豬肉，肉食文化已在當地根深蒂固。

只要在薩摩購買豬肉，製作火腿便不是天方夜譚。

管家原先以爲恐怕得前往福爾摩沙，聽聞此事不禁鬆了一口氣。

最後是雞蛋，這是最爲容易取得的食材。

日本因爲以雞鳴作爲報時之用，故家雞十分普及，也因此容易獲得雞蛋。

——至此。

在以管家爲首的眾多部下盡心盡力之下，才能完成對多羅蒂婭·科耶特而言僅僅是日常中一部分，卻既貴重又特別的「早餐」。

「今天的雞蛋料理是什麼？」

「是水波蛋。」

「這樣啊。」

這是某天早上發生的事。

與管家稍談幾句後，多羅蒂婭·科耶特開始優雅地享用早餐——

接著對在一旁待命、身形魁梧的 Assassin 甲賀三郎說：

「今天的巡邏範圍要擴大一些，應該開始抱持備戰心態了。」

即便使喚可謂超凡之存在、神秘之具現的從者，她也絲毫沒有遲疑。

這正是多羅蒂婭．科耶特。她具有與生俱來的貴族自覺，擁有統御他人、對領地與人民負責的王者風範。

她的言行舉止十分出色。

甚至令人想讓自己的子孫也能一睹那威風凜凜的模樣。

「Assassin，怎麼了嗎？」

「不，只是在想些事情。」

「這樣啊。」

多羅蒂婭若有所思地說：

「……我無意小看具有神性的英靈的抵抗能力，但你若有事相瞞，我會用魔術讓你老實招來，做好心理準備吧。」

「呵呵，公主說話眞有趣。」

「別叫我公主。」

她嘆了一口氣。

接著，她將水波蛋放入口中，並脫口而出：

「哎呀，今天的雞蛋料理眞美味。」

……之後。

據說從管家喬瓦尼口中聽聞此事的廚師感動得淚流不止，並告誡孩子將這一天訂爲特別紀念日，後代子孫都應誠心崇敬。

土御門泰廣與 Caster

「難吃。」

土御門泰廣邊嘆著氣，邊伸出筷子。

「難吃、難吃、難吃……」

味噌湯、醃菜、白飯、當季生魚片，每一道在江戶都是基本料理，品質也沒問題。至少與庶民的家常菜相比，等級好上太多了。

縱然家道中落，終究也是名門土御門家，正常人對食物難免有偏好，但也不至於對這頓餐點的質與量感到不滿。那麼，是否他的味覺出了問題？並非如此。

土御門泰廣之所以對餐點不滿，是因爲別的理由、別的情感。

土御門泰廣對一切都感到不滿。

無論現今狀況、閉塞的江戶，或是淪落的自己，他對一切都

不滿。

即使料理再怎麼美味，若無心享用亦是枉然。

因此，這些新鮮的材料與下足工夫的手藝，對土御門泰廣而言也只是難吃的東西。

但他仍不得不吃。與其說是爲了補充營養，更是爲了維持名門形象。他口中的難吃一詞也不能讓任何人聽見。

「——我的御主眞是可憐。」

Caster 稗田阿禮如此說著，拋下隔壁房的土御門泰廣而去。

Caster 那敏銳的思考，闖入土御門泰廣的內心最深之處，並看穿他的一切。

他的內心既微小又脆弱。然而，他那份自豪是可以理解的。也確實能理解。

他的心願，以及對現狀的不滿——毫無疑問是眞心的。

吃著庶民想吃也吃不到的一級料理卻抱怨難吃，也是眞心的。

若要讓他覺得餐點好吃，除非託付於盈月之儀的願望實現。

在他復興名門土御門家，獲得周遭崇拜的眼神之前，想必會持續認爲一切都難吃吧。

土御門已經被逼到這個地步了。

無論再怎麼對幕府展現餘裕，無論再怎麼藐視敵人，仍沒有一件事讓他心安。

就如同被執著的貓追著跑的老鼠一般，他心中的焦躁可是非比尋常。

「不過，土御門，這樣就對了。你的卑微感正是在盈月之儀得勝所不可或缺的。」

擁有卑微感、傲慢心，以及最重要的膽小，是一件非常棒的事，Caster 笑著心想。

因爲在這修羅與羅剎相殺的盈月之儀，獲勝即等同於生存。

土御門泰廣一邊喊著「難吃、難吃」，一邊在內心盤算著陰謀。

並祈禱餐點總有一天會變得美味。

由井正雪與 Rider

「謝謝，今天的早餐也很美味。」

由井正雪在涼爽的早晨中，全身彷彿散發著光芒。

不難想像前來收拾餐點的侍女屏住呼吸，停下動作的原因。

她看著正雪看得忘我了。

那吹彈可破的雪白肌膚、好似被朝露濡濕般帶著憂愁的眼眸、如夢似幻的朱唇——

由井正雪天生皮膚白皙，在清晨時分更是散發一股超乎人世的美，這件事只有在其身邊侍奉的侍女，以及極少數的門生之間知道。

這名侍女原先陶醉於那絕世美顏，卻在下個瞬間露出沮喪的神情。

由井正雪今天早上的餐點依然只減少了一點。

而且少的只是一點點湯而已。

其他完全沒有動過。

無論是白飯還是醃菜，就連珍貴的醃製鮭魚切片也都保持原樣。

「對不起、對不起。不合正雪大人的口味……」

「沒那回事。」

由井正雪以眞摯的眼神看著侍女說道：

「我生來胃口就小，請原諒我每天早晨都如此無禮。我對各位一直都十分感謝。」

彷彿如實陳述般，訴說著這些話。

「……御主眞是罪孽深重。」

Rider 源賴光一邊解除靈體化，一邊聳了聳肩，悲憫地看著滿面通紅、流下淚水快步離去的侍女。

「她那是對您單相思吧。眞令人同情。」

源賴光隔過黑色面罩，對由井正雪說道。

Rider 所言也不無道理。

無論是侍女或門生，對於心底藏著超乎忠心與友情的情感，對自己投以炙熱眼神的人，由井正雪總是抱持著某種罪惡感。

首先，自己並非自然降生的生命，而是人工製造的僞造生命，亦即西洋魔術所謂的人工生命體亞種。彼此並非同類，亦非同種，這些他們並不知情。

再者——

「您的命不長。若要導正世界……」

「當然，我會得到盈月，匡正扭曲的世界。我正是爲此而存在。」

——自己的壽命很短。

由井正雪的肉體早已快到活動極限。

所謂的生來胃口小，其實是謊言。

僅僅是因爲這副只剩下等待死亡的身軀，早已不需要進食罷了。

既然已知無法吸收食物化爲營養，那麼能做的也只剩不要食用，祈禱這些食物能轉由他人享用。

由井正雪不願進食。

只爲了成就己願，奉獻全部身心，在儀式中得勝。

宮本伊織與 Saber

一菜一湯。

味噌湯與魚乾，或是醃菜。

如果能再加上一碗白飯或飯糰，那麼便再好不過了——

對宮本伊織而言，一餐大概都是如此。

乍看之下沒有不自然之處，但事實上這正是枯燥無味的體現。

一頓不錯的餐飯，只需營養充足，並有足夠的量得以支應在一定時間內的活動。

是補充營養，供應身爲戰鬥裝置的自己活動所需能量的資源，其中沒有任何挾帶情感的餘地。

儘管好吃的東西就是好吃，難吃的東西就是難吃，但他也不會做出評價。

只會冷靜地攝取這一菜一湯。

這就是宮本伊織的每一餐。

說到底，這並不是本人說出口的。僅是 Saber ——日本武尊從這幾日的觀察與感受中得出的想法……

但總有種雖不中亦不遠矣的預感。

今天早上也一樣。

伊織只是淡然地重複將食物送入口中、咀嚼、吞嚥。

絲毫不品嘗味道，亦沒有任何想法。

若 Saber 說好吃，他也只會簡短附和而已。

有時會像突然想到似的，以自言自語般的口吻告誡道，即使對手是敵人也不該斬殺他人，若是敢死之士或熟練的刺客倒是無可奈何，但若不是的話就必須避免。

無論吃下多少如此美味的米飯、多少鹽分加得恰到好處的飯糰，這個不通情理的人也總是連笑也不笑一下。

這等美味的食物，就連木雕也會產生些許感慨吧。

「Saber，怎麼了？」

「嗯。」

「嗯？」

「我在想啊，伊織你眞是過著無聊的人生呢。」

Saber 直接說出內心話。

總覺得他對這句話會稍有誤解。

「……眞是直言不諱。怎麼了？不喜歡今天的早餐嗎？明明和昨天的菜色相同啊。」

「嗯，很好吃。」

「那爲何突然挖苦我？」

「嗯——」

看來果然沒能好好傳達。

明明生活在每天都能吃到如此美味早餐的環境，卻無法看見其中的價值，這樣的人生也未免過於可惜。他肯定連這份可惜也無法體會，畢竟他就是過著如此無聊的人生——

如果把 Saber 在這個剎那的思考化爲言語，便是如此。

但顯然是失敗了。

Saber 生性不善言詞。

不僅是現在——

平時也總是習慣只說結論。

這或許能歸咎於從小便在不太需要言語表達的環境中長大吧。

父王與兄長們的言語不是指示就是命令，Saber 的雙唇只需說出表達明白的簡短語句。

Saber 也不曾和同齡的男孩女孩玩耍，驀然回神，手中早已緊握著劍。

周遭對於總是言簡意賅的殺戮裝置敬而遠之，在Saber的記憶中，一直以來都是獨自一人。戰時與平時並無區別。即便是用餐時間，似乎也很少有機會和他人這樣聊天。

這種日子之所以改變——

是的，正是因爲遇見了所愛之人。

無論是揮劍、呼吸、目望天空、腳踏大地。

一切都出現了變化。

就連原本不過是爲了戰鬥而補充營養的用餐也有了不同的意義。

「……一下默不作聲，一下又面露笑容。Saber，我真搞不懂你。」

「呵呵，我想起了一些美好的回憶。」

「在吃飯的時候？」

「就是因爲在吃飯啊，伊織。」

Saber 說著，露出一抹微笑。

對 Saber 而言，用餐這件事——

就是在感受。

感受熱騰騰白米飯的色澤，感受咀嚼時入口的甘甜，感受各種事物。

感受高掛空中的和煦陽光。

感受扎根大地而活的百姓。

以及感受並思念——教導自己善良卽爲尊崇並守護這一切，如今身在遙遠彼方的那柔和的笑容。

這就是爲何卽使從者在本質上不須飲食，Saber仍會不時索求白米飯。

他絕非是爲了補充營養而用餐。

但每當他用餐時，總會短暫回想起那天的愛，身心湧起活力。

每一粒白飯。

每一次咀嚼的品嘗。

——愛，正是Saber戰鬥的力量。